英語科指導法Ⅰ・Ⅱでの試み

文学部　英語英米文学科
准教授　奥　村　栄　子

通年の科目でありながら前後期いずれからでも履修を始める事が出来、しかし履修内容では通年科目になる、という課題を解決し、学生が自立した学習者になる為の一助ともなる、英語英米文学科（以下英米学科）２回生開講の英語科指導法Ⅰ・Ⅱ（以下指導法）クラスにおける実践的な取り組みについて述べる。学生は、模擬授業をするだけでなく、サポーターとして、「先生」同様に指導法の実践体験ができる。

後述するこの取り組みを実践するに至ったのは、英米学科の「目玉」である、ハワイ大学セメスタープログラム（以下ハワイプログラム）に参加する学生の便宜を図って、通年科目である指導法クラスを、前後期、いずれの学期からでも履修出来るようにした事による。

このハワイプログラムでは、学生は、ハワイ、ホノルルに有る学園のセミナーハウスで寮生活を送りながら、前期あるいは後期の、半期、ワンセメスター、の期間、ハワイ大学キャンパスで、ハワイ大学アウトリーチカレッジが提供する英語の語学プログラムや、神戸女子大学の為に特別に用意された英語プログラムを学習する。寮であるセミナーハウスに収監できる人数の制限上、英米学科の学生全員が参加できるわけではないが、前後期合わせて、ほぼ半数の最高 32 名が参加する。

そして、近年の学生の「資格志向」もあって教員免許状取得希望の学生の人数は年々増加して来ており、ハワイプログラム参加者の中にも教員免許状取得希望者が大勢おり、各学期で、履修生の半数近くが入れ替わる、という事態も起こり、前後期、いずれの学期からでも履修出来るようにした方が、学生の利益になる、と判断したのである。

しかしこの結果、ハワイプログラム参加者の都合で、前期から指導法クラスの履修を始める学生（後期ハワイプログラム参加者）と、後期から履修を始める学生（前期ハワイプログラム参加者）とができ、前後期いずれの学期においても、「新旧」学生が混在する、つまり、新しく履修し始める学生と、既に半期履修済みの学生とが、常に混在する状態になった。

そこで、通年の科目ではあるが、前後期どちらの学期から履修を開始しても、学生に不利益にならず、余分な負担を強いる事なく、学生が滑らかに学修が始められるよう、前後期いずれも、15 回の構成はほぼ同様にし、通年履修で、指導法クラスの目標を達成出来るようにした。

また、この為に各学期の目標も特化させた。各学期とも、履修を開始する「新履修生」が、元気のよい模擬授業を出来る事、としたのである。これは、当然の事ながら、「新履修生」が最も不安に感じ、緊張するのが「模擬授業をする」事だからである。それなら「新履修生」にはのびのびとした雰囲気の中で、模擬授業を元気よく出来る為の、基本中の基本の態度を身につけ、視覚教材の作成などさまざまに授業を工夫する楽しさを味わってもらえるよう、また模擬授業の時間を可能な限り多めに取れるようにして、アクティビティを中心に据えた実践的な面を優先させる事にした。

これは、まず、２回生というこの指導法クラスの開講時期や学生が最初に遭遇する教科科目である事、

また学生が更に深く学修したいと思えば、３回生で、英語科指導法Ⅲ・Ⅳは無論、選択科目として、教材研究･教授法（半期）､英語科教育総合演習（半期）､Teaching English as a Foreign Language 演習（半期）など、潤沢に教科科目が開講されており、十分な「バックアップ」体制が整っている事、そして座学が苦手で、マニュアルやお手本好きの最近の学生の学習傾向、等を考慮したからである。

そして一方の半期履修済みの学生達は、その半期分の経験を活かして、次の学期では「新履修生」のサポーターに、二人一組で（学生の希望による。）回る事にしたのである。教師が教える事が中心ではなく、生徒が学習の主役となる生徒中心の、中・高の生徒達に考えさせる模擬授業を、「新履修生」が元気よく英語で出来るよう、サポートする。このサポーターとしての学期では、「新履修生」をサポートする際に、先に述べた指導法クラスの理念を活かしたサポート、即ち、サポートしすぎず、「新履修生」に考えさせるサポートが、どれだけできるか、に自身の学修成果が試される。最初の学期では、サポーターと相談して、とにかく模擬授業をこなす事に集中していた学生も、ここで、自分の助言などが説得力をもつよう、一段と、しっかり教科書を復習する事にもなる。

また、このサポーター役で、学生は、次に述べるように自分の模擬授業を、時間をおいて再度見る事になるので、あらためて客観的に自身の模擬授業を観察、追体験して、一層詳しく分析ができる。将来の模擬授業に向け、自分で改良して行けるのである。同時に自分の学修成果をサポーターとして実感しながら、実際の「先生」役をもこなす事になる。

このようなクラス内容にした為、各学期の前半はサポート体制に費やされ、後半は、模擬授業実施の時間にあてられる。「50 分の模擬授業とその後のコメント、フィードバックの時間」という形態では、「新履修生」全員が 50 分の「フル模擬授業」をするだけの時間は取れないので、クラスでは、「新履修生」の人数にもよるが、一人が実施できる模擬授業の時間は、15 ～ 20 分程度にならざるを得ない。それで、この前半には、学生による 50 分の研究模擬授業の DVD や、現実の中・高の教諭によるモデル授業などの DVD 視聴、加えて、履修生に好評である、現サポーターが先学期に行った模擬授業の録画を見て、本人が自身の模擬授業について説明する、等の模擬授業についてさまざまな例が見られるようなアクティビティや､クラスで実施予定の模擬授業のグループ内での予行練習等が含まれる｡各アクティビティの直後には、「新履修生」とサポーターのグループで、アクティビティについての意見、質問の交換や討議をし、それを経て、クラスでの討議ももたれる。

サポーターには、サポート内容についての報告、プログレスレポートを、何回分かまとめて、学期中に３～４回程提出してもらい、期末には、ピアサポート体制についてのレポートを、これは「新履修生」にも、提出してもらう。それによると、このピアサポート体制は、両者に好評のようである。

サポーターは、模擬授業の教師役とは違った、実際に指導者としての自覚を得られ、また実習先の教室でも必要である、生徒とのよいコミュニケーションや関係の取り方を、「新履修生」とのそれに重ね合わせておおいに参考になる、といったレポートが多い。「新履修生」は、クラス中に挙手で、あるいは教員に直接質問したりコメントを述べるよりは、サポーターとのグループで同じ事をする方が、はるかに自由にやり易いし、何事についても遠慮なく訊けるので模擬授業への不安もすぐに解消し、サポーターと一緒になってさまざまに模擬授業について考え工夫をしようという意欲が湧く、等である。

このような体制では、サポーターと「新履修生」の人数の割合の変動による影響が出ないとは言えな

い。例えば学期によっては、「新履修生」の方が多すぎて、サポーターが少なすぎるとか、その反対の場合である。しかし全体の履修生の数は毎年ほぼ一定しているからか、現在迄は、極端にこの数の均衡が崩れるような事は起こっていない。

そして学生達に一番注意を喚起している事は、「新履修生」がサポーターに頼って教えてもらうだけの存在になら無いように、また反対にサポーターが、自分たちに出来る限り、と、過剰な迄に教えすぎたり、あるいは何についても全責任を感じてしまう事が無いように、という事である。「新履修生」が主体的に学習出来るようにしむけるのがサポーターの役目であり、学修する責任は両者に同等にある、というのは、通常のクラスと同じである。

現在のところは、こちらの予想よりも、うまく機能している。４月からの新学期では、担当教員の出る幕が、現在の状況よりも更に一段と無くなり、その次の学期では更に減少し、と担当教員の介在が必要でなくなり、反比例で、学生が一段と学修力と学習力を発揮して自分たちのクラスは自分たちで取り仕切る事が出来るようになるのが目標である。

経済的思考からみる「社会」

文学部　神戸国際教養学科
准教授　小　沢　康　英

私は経済分野が専門であり、本学では「現代社会と経済」など経済関係の科目をいくつか担当している。中学校・高校の社会科関連は地理、歴史、公民の三分野に分かれており、経済分野はさらに公民のなかで暮らしに係わる項目の一つとして扱われている。経済分野の知識は公民の授業にはもちろん欠かせないが、地理、歴史においても基盤的な知識として関心を持ってもらいたいと願っている。

普段の暮らしのなかでスーパーマーケットにおいて買物することはよくあることだが、古代、まだ貨幣が存在しなかった時代には、海の民と山の民が“魚”と“山菜”とを直接やりとりするなど、物々交換がなされていた。海や山といった個別の地域にはそれぞれ特色があり、各地域の暮らしや特産品も地元の特色を活かしたものとなる。その上で必要に応じて異なる地域の人々が行き来し、或いは特定の場所（「市場」）に集い、特産品が交換・交易された。

もっとも、市場において交換する品物の種類や価値がうまく合わないなど、物々交換はあまり便利な方法ではないため、交換できる共通の物として「貨幣」が流通するようになった。腐り難く品物自体に価値のある米や布が貨幣の役割を担うようになると、価値の蓄積が進み、多くの人々が集まった共同体の内部或いは共同体間のあり方にも影響を及ぼすようになる。品物を交換する場である市場やそこで利用される貨幣は、経済学思考の基本的な道具立てでもある。

また、社会のなかで起こっている経済現象は１つの要因によるものではなく、複数の要素が絡まりあって起きた結果であるという認識も重要である。それも、ある経済現象が人々の暮らしに与える影響にはプラスとマイナスの両面があり、事象が起こった場所や時代により、そのどちらが強く現われるかが変わってくる。

たとえば、1990年代後半以降、デフレスパイラルという言葉がよく使われるようになった。物価が持続的に低下する状況をデフレという。物価が下がるだけであれば消費者は喜んで商品を購入するが、値下がりした分だけ企業の収益が低下すると、企業が支払う給与も削減されることとなる。消費者は給与の低下に伴い家計が苦しくなり商品の購入を控えるようになる。売れ行きが悪くなるなか企業は、消費者の関心を引くため、更に価格を下げざるを得なくなる。こうした悪循環が続き、物価が低下していくことをデフレスパイラルという。デフレスパイラルによる物価の下落は、経済規模を収縮させ人々の生活を苦しくする。一方、画期的な技術革新や生産コストの圧縮により生じた物価の下落は人々の暮らしを豊かにする。このように経済現象は複数の要素が絡まりあっていることと、表と裏、光と影があることを忘れてはならない。

さまざまな地域別、歴史的な空間のなかでは、それぞれ人々の暮らしが営まれており、その人々の暮らしの基盤の一つとして経済的な背景がある。経済的な要因からも社会を捉える視点を育てることで、社会科関連の授業の幅を広げていっていただきたいと思う。

しっかり教え、信じて待つ
――体罰に思う――

文学部　史学科
教授　中　尾　友　則

大阪市の高校で部活動の指導教員の体罰によって生徒が自殺するという事件が起き、体罰があらためて問題となっている。私が小・中学生の頃は軍隊経験のある教員も何人もいて、今と比べれば体罰もかなり大目に見る空気が強かったように思う。小学五・六年のときの担任は宿題を忘れると必ず強烈な平手打ちを加えたが、保護者の間では教育熱心な先生として知られていた。また私は中学から高校の途中まで野球部に所属していたが、とくに中学一年の時は毎日のように体罰を受けた。もっとも私（たち）の受けたのは教員からではなく上級生からであったが、それはほとんど部の伝統となっていた。面と向かって張り倒すという単純なものから、肩が抜けそうになるまで鉄棒にぶら下がらせる、膝のうしろにバットを挟んだまま正座させる等々、まことに多様なメニューが用意され、私はそれらの多くを身をもって体験した。そんな時代もあったのだと笑い話にできればよいのだが、現実はそう簡単には変わらないらしい。

十年余り教職にあった私の経験によれば、体罰をする教員には（感情的に自分の憤懣をぶつけるような全くの不適格者を除けば）結果を急ぎすぎる人が多いような気がする。教育が知識や技術、思考能力、社会性などを身に着けるために行われるものである限り、まじめにそれに取り組まないものが叱責されるのは当然であろう。しかし、叱責の仕方は難しい。人（児童や生徒）は生きものである。しかも、心理も生理も大きく変わる年代を生きている。たまたまその朝両親が離婚話をはじめたかもしれない。友人とのあいだに厄介なトラブルが起きたかもしれない。あるいはその日は体調がすぐれないのかもしれない。児童・生徒は、そうしたいろいろの悩みや迷いを抱えながら生きている。それらは一見無駄なことのように見えるかもしれないが、それらと向き合い自分なりに乗り越えていくことがその子の自立・成長の糧になっていくのだと思われる。教育者はそれを忍耐強く見守ることができなければならない。

体罰は素早い効果が期待できるように感じられるかもしれないが、長い目で見れば児童や生徒の自立・成長にどれほど役立っているかは疑問である。しっかり教え、信じて待つ、こういう姿勢が教育者には必要であろう。

面接力向上のために③（面接の実際）

教職支援センター長
岸　本　芳　信

一昨年･昨年と、面接力向上のためにと題して、①対話力、②面接の基本と話を進めてきた。今回は、その３として“面接の実際”について整理してみたい。

今一度、面接とはと考えてみると、その人の人柄、教育に対する心構え、受験地の教育への想い等を評価しようとするものであり、受験者としての対策は、教育・社会の動きを観察するとともに、自らの教育理念を確立し、教育に対する熱意を高める等、日頃から、教育・社会問題に関心を持ち、自己を磨いておくことである。

ここで、いま一度、面接の基本対応の項目を示したい。それぞれの具体的解説については、昨年の年報等を見ていただきたい。

⑴　受験生らしい清潔感、活力を与えよう。
⑵　意欲・想い、自らの誇れるところを積極的に伝えよう。
⑶　表現力を豊かにし、面接官の心に入ろう。
⑷　面接官の質問の意図を理解するために、聞く耳を育てておこう。
⑸　経験・体験を基に、自分の言葉でわかり易く端的に話そう。
⑹　受験地の教育状況を理解しておこう。

本報告では、いくつかの事例について応答例をあげ、その内容について考察してみたい。

１　応答の基本

⑴　好印象を与える応答

まず、第一印象から気をつけたい。入室時から活力ある礼儀正しい動き、はきはきとした応答で、好印象を与えたい。質問から返答まではあまり時間をとらないで、はっきりした口調で行いたい。

⑵　短時間で簡潔に話す

一つの事項に対して、30秒程度を返答の目安としたい。長くなっても１分以内で返答するのがよいでしょう。質問－応答のテンポがよくなり好印象である。普段から要点をまとめる訓練、適切な言葉遣いの訓練が必要である。頭の中で考えるだけでなく、文章にして書いてみて、実際に声に出して喋って見ることが必要である。

したがって、自己PRについては、１つのことについて30秒とすれば、２～３つのことを考えておくとよいでしょう。１～２分の対応ができるでしょう。

⑶　結論を先に話す

応答は簡潔明瞭に、結論から述べ、あとでその理由を付け加えるとよいでしょう。何が言いたいのかが的確に伝わるので、面接官は聞きやすい。内容によっては、結論で「〇〇だ」という限定的な応答をしたり、他の人を非難したりしないほうがよいでしょう。

⑷　心を込めて話す

自分の思いをしっかりと、相手の目を見て返答したい。その際、難しい言葉ではなく自分の言葉で、経験を交え具体的に、心を込めて話すことによって、相手の心に残る返答になるでしょう。

2　質問（Q）－応答（A）例

（Q１）なぜ本県を受験されましたか。

（A１）本県の教育の○○という方針（教師像）、説明会でお聞きした△△に、惹かれました。本県の教師になって、教師を目指して学んできた□□を、○○、△△の達成に向けて力を発揮できるように努力します。また、本県は生まれ育ったところです。地域のよいところ例えば◎◎を次世代に伝え、地域の発展に寄与できる子どもの育成に携わりたいです。

（解説）まず、受験希望地の教育方針、求める教師像をしっかりと理解しておきたい。その中で、自分の思いと一致する１～２項目について、自分の言葉でしっかり応答したい。

（Q２）なぜ○○学校（校種）を受験されましたか。

（A２）小学校の時に「私たちのことを第一に考えてくれる、心温かい先生に出会いました。」その頃から先生に魅力を感じていました。だんだんとその思いが強くなり、大学で教職を目指して学びました。そして、神戸市のスクールサポーターとして、小学校で子どもの学習支援をさせていただきました。その際に、かかわった子どもの日々の成長を目の当たりにし、また、指導していただいた先生の子どもへの対応のすばらしさを見て、小学校の先生になりたいという思いがより強くなりました。

私は、優しさと誠実さで子どもに接することができ、以前から、親戚や近所の小さな子どもに慕われてきたと思っています。小学校で６年間、子どもの成長にかかわりたいです。

（解説）教師を目指したきっかけと本気になった出来事等、目的校種と自分の性格やその校種での教育に対する思いを述べたいものです。

（Q３）自己 PR をしてください。

（A３）私には、責任感と向上心があります。中・高等学校の部活動で軟式テニスに打ち込んできました。練習や試合でうまく行かないときが多かったのですが、その日のうちに、「何故」を繰り返しながら修正するよう、常に向上心を持って取り組んできました。また、３年生では部長を任され、成績向上と部や部員のまとまりや協調に力を注いできました。当時、顧問の先生からも、「今年はよくできた部活動であった」とほめられた記憶もあります。

また、情報が好きで、パソコンを使うのが得意です。プログラムにはあまり強くありませんが、パソコンを使った文章作り、表計算は何とかこなせます。これからの教育に活かしていきたいと思っています。

（解説）自分の得意とするところを２つ程度述べたい。その際、なぜそのことが得意なのか、理由もきっちりと述べること。「ある部活動をしていたから」だけでなく、部活動でどの程度の練習をし、どのように困難を克服してきたかも具体的に書くこと。

（Q４）学生時代に特に力を入れたことは何ですか。

（A４）学生時代には、部活動やボランティア活動に力を入れました。特にボランティア活動では、小学校で特別支援の必要な子どもの指導補助をさせていただきました。はじめは何故言うことを聞

いてくれないのか悩んだり子どもの行動に戸惑うことも多かったですが、先生の指導を受け、毎日復唱するなど一生懸命に取り組みました。対応の仕方での子どもの変化がよくわかり、上手く関わることができたときには充実感がありました。また、アルバイトで販売をしたこともありますが、お客さまへの対応姿勢、言葉がけを学ぶこともできました。

（解説）学業、部活動、ボランティア活動など、どんなことに取り組み、どのように力を入れたのかを述べる。多くの活動の中で特に話したいことを、具体例を挙げて述べること。アルバイトで褒められたこともよいが、アルバイトが先行しないほうが聞きやすい。

（Ｑ５）採用された場合、どんなことを研究したいですか。

（Ａ５）大学時代に理科教育のゼミに所属していました。理科実験に興味を持っており、小学校でできる実験をできるだけ多く取り入れて理科の授業を行い、子どもたちが理科に興味を持つようにしたいので、多くの実験方法や実験例を学び、子どもたちが気軽にでき、理科が好きになるような授業方法を研究したいと思っています。

（解説）教員生活を送るうえで、生涯にわたって研究していきたいことを述べる。自分の専門領域、生徒指導、進路指導、その他の教育活動で考えるとよい。小学校希望者であっても、自分の得意教科、今後深めたい教科を持っておくと応えやすい。

（Ｑ６）あなたの長所、短所を教えてください。

（Ａ６）私は何事にも粘り強く、丁寧に対応することができます。子どもの頃から工作が好きで、作品ができるまで頑張ってきました。うまく行かないときは、少しでもいいものができるようにと、時間さえあれば完成に向けて取り組んできました。また、少しでも気に入らないところがあれば、納得するまで取り組んできました。したがって、小学校で作った水族館模型も、思ったように完成した時の喜びは感動的でした。

一方、一生懸命になった時は、周りを見渡す余裕に欠けるときがあります。物事に熱中しながらも、周りを見る余裕が持てるように気をつけて行動するようにしています。

（解説）まず、長所から述べよう。自信を持って何故それが長所かも述べたい。次に短所であるが、自分をきっちりと分析していることを示すためには、短所もきっちりと述べたい。ただし、教員として致命的なことや気がかりに思われる短所は避けたい。また、長所の裏返しとして短所を述べること、矯正しようと心がけていることもきっちりと述べたい。

（Ｑ７）協調性のある人間関係を保つためにはどのようにされますか。

（Ａ７）たとえば、友達と旅行をしたりするときは、行先や日程の調整が得意です。人数にもよりますが、それぞれの人の意見をよく聞き、皆で話し合いながら、できるだけ多くの人が気に入るように心がけています。それでもなかなか決まらないことがありますが、その時は、いろいろな条件を整理しながら、リーダーシップを発揮し、皆がよい条件と思える所になるよう方向性を示します。その際には、自分の思いもしっかりと話しながら、しかし、自分の意見だけを通すことのないように気をつけています。友達同士が人間的に温かい関係を保てるように何時も気をつけています。

（解説）教員生活は、多くの同僚たちと協調して仕事をすることが求められる。したがって、協調して仕事ができる人材が必要である。私は強い意志を持ってはいるが、仕事をするにあたっては同僚と

よく話し合い協調できるということを示したい。

（Ｑ８）コミュニケーション能力を高めるためにはどうすればいいですか。

（Ａ８）最近の社会の状況を見ると、自分の思いが先行し、他人の思いや行動を意に介しない場面によく出会います。また、言葉遣いがよくないために、お互いを誤解したりしてトラブルになる場面も多くあります。ほんの些細なことでも、相手の思いを十分に聞ける力、自分の思いを正確に保護者や児童生徒に伝える力が必要です。そうすることで、お互いが心を開いた関係になり問題解決に向かって前進できると考えます。したがって、正確な言葉、相手を思いやる言葉、相手の思いを聞き取る力を高めるよう努力しています。

（解説）対児童生徒、保護者、地域社会、教師とのコミュニケーションは欠かせない。話し方一つ、聞き方一つで、仕事がうまく行ったり行かなかったりということになる。相手の立場を考えたコミュニケーションは欠かせない。

（Ｑ９）指導力を高めるために心がけていることはありますか。

（Ａ９）学校の中心は、知識・技能・体育・徳育の向上にあります。そこでまず、教科指導力を十分意味に付けて、日々の授業を大切にする教師になりたいと思っています。そのためには、教科の内容だけでなく、授業中の話題を豊富にしたり、いくつかの角度の違った方向から考えさせるなど、教え方や子どもの心をつかむ指導方法について日々研修していきたいです。

また一方で、生徒指導の力、学級経営の力も身につけ、学級の人間関係を安定させることによって、学習環境がよくなり、子どもたちの学力も向上していくと考えます。このことは、今多く生じている、いじめや暴力の防止にも役立つと考えます。さらに、保護者の信頼を得ることにもつながると思っています。

（解説）最近、体罰やいじめの問題が多く発生している。教科の指導力とともに児童生徒・保護者の指導力も大切な能力である。この力は一朝一夕には身に付くものではないが、少なくとも共感的理解をはじめ基礎的なことは身に付けておきたいものである。

（Ｑ 10）今までに一番苦労したことは何ですか。また、どのようにして乗り越えましたか。

（Ａ 10）部活動で、いくら練習しても試合に勝てず、レギュラーをはずされてしまったことがあります。このときは何時やめようかとも考えました。しかし、人より早く練習に着手し、何故勝てないのかを考え、友達にもどこがだめなのかを聞きました。なかなか改善はできませんでしたが、周囲の人の支えもあり粘り強く対処でき、半年後くらいから、不思議と勝負力がつき試合にも勝てるようになってきました。その時の喜びは何事にもかえることができませんでした。粘り強く考え、身体を使って努力することの大切さを学びました。

教師になった時にも、子どもたちに、根気強い努力と前向きな考えが、自分の困難や人生を切り開いていくことを教えていきたいです。

（解説）自分の生活を振り返ってみて、一番苦労したこと、挫折を味わったことについて、どう乗り切ってきたかは、その人の今後の生活態度に表れることである。今後の教員生活においても、いろいろな課題に出会うことになるが、どんな気持ちで、どのように行動し乗り越えていくかが試されている。その対応の仕方を見ているのである。

（Ｑ 11）最近の出来事で気になっていることは何ですか。

（Ａ 11）最近、体罰やいじめが教育界をにぎわせています。どちらも法的に駄目なことはわかっているのですが、なかなかなくなりません。教員や子どもは理論的にはわかっているはずです。それでもあちこちで事件が発生したり話題になったりする理由として､次のように考えます。一つには、頭の中ではわかっていながら、言葉で上手く伝えられない時があることです。二つには、相手の気持ちがよくわからずに、自分の思いを強引に実行しようとする時です。三つには、このくらいという軽い気持ちが優先する時だと思います。

常に冷静に考え、子どもの心を大切にした指導ができ、初心に帰って物事に慎重に対応できる教員を目指したいです。

（解説）社会の出来事にどれだけ関心を持っているかが問われている。新聞やニュースへの関心度、興味の方向、身の回りにどれだけ関心を持った生活をしているかなどが問われている。普段から社会の動きに敏感になってほしい。

以上、いくつかの面接対応例を見てきましたが、どの課題についても共通していることは、１の「応答の基本」に述べたとおりです。そして､普段から「自己 PR」「教育の今日的な課題や教育関連用語」「受験地の様子や求められている教師像」「児童生徒・保護者・地域・教師間等との信頼関係と協力関係」「教師としての力量と自ら目指す教育論」等の事項について、「自分だったら〇〇する。」というように考えをまとめておくことも必要である。

以上、No.5、No.6 とあわせて、考えていただければ幸いである。

（参考図書など）

１　教員養成セミナー（時事通信社）
２　教職課程（協同出版）
３　公務員受験指導ハンドブック（実務教育出版）
４　教職課程年報（神戸女子大学教職支援センター）
５　神戸女子大学の学生の面接練習での応答

平成24年度の教育実習を終えて
―実習ノート、事後指導レポートから―

教職支援センター
大　森　俊　昭

> 私にとって教育実習の１ヶ月間は、人生で一番濃く、一番短い１ヶ月間となりました。こんなにも悩み、試行錯誤をし、多くのことを経験できる日々は、日常生活では味わうことができません。

これは、本年度教育実習を終えたある学生の感想です。これまで、学生として学ぶ側であった者が、学校現場で教える側に立ち、「先生」と呼ばれ、児童生徒の純粋な目で見つめられ、それに応えようとして一生懸命頑張った姿を物語っています。

教育実習は、学校現場の先生方や児童生徒の協力を得て、「直接的な教育活動を通して、学校教育全般への理解を深め、教師として必要な知識・技能を身につけるとともに、実践的な指導力を培う」目的で行われるものです。教職を目指す皆さんにとっては、単に学校現場を知る、大学で学んだことを学校現場で実践するだけではなく、学校生活全般における児童生徒との人間的な関わりによって、教師として、社会人として、また人間として、これまでの自分自身を見つめ直すことができる機会ともなるものです。

平成24年度も多くの小・中・高等学校にご協力いただき、200名を超える学生が、大きな成果をもって無事に教育実習を終えることができました。ここでは、学生達が教育実習で何を学び、どのように成長したのかを、実習中の記録である実習ノートや、12月１日に実施しました「教育実習事後指導」のレポートの記述をもとにまとめていきたいと思います。

１　学校現場や児童・生徒のことを少しでも知ろうと、目標をもって一生懸命取り組んでいる。

事前指導を受けたとはいえ、教育実習を迎えるまでは、どの学生も大きな不安を抱えていました。児童生徒との関係づくり、指導教員や教職員との関係、実習授業などの初めての体験に、「こんな私が児童の前に先生として立つことができるのだろうか、子ども達とうまくコミュニケーションをとっていけるのだろうかと、さまざまな不安に押しつぶされそうでした。」と振り返る学生もいます。

しかし、明るい笑顔の児童生徒や優しい先生方に受け入れられて、それぞれの学生が、授業参観、指導講話、行事参加、授業実習、また児童生徒との日常的な関わりなど、精一杯に取り組みました。早朝から晩まで学校現場にいて、授業、休み時間、昼食等を児童生徒と一緒に過ごし、放課後は学んだことの整理や指導案の作成、自宅に帰ってからも授業準備や

教材作りなど、ホッとする時間もなく睡眠時間も少なくなったようです。しかし、丁寧にまとめられた指導講話の記録や参観授業の記録、そして細かい字でびっしりと書かれた「一日のまとめ」などから、教育現場で学んだことをひとつ残らず記録して残しておこうという気持ちが感じられ、一人ひとりが意欲的に教育実習に取り組んだことがうかがえます。

この実習で、3つの課題をもって取り組みました。1つ目は「子どもを知り、子どもから学ぶ」です。（略）できるだけ多くの時間を子ども達とかかわることを大切にして過ごしていると、毎日どんどん個性や良いところが見えてきて、それをどのように引き出し全体に活かしていくか考えるようになり、新たな視点で子ども達や先生の指導を見させていただきました。（略）

教育実習に当たって、３点の目標を掲げました。１点目は学校全体の観点より、「学校組織の仕組みを学ぶ」ということです。たくさんの講話をいただいたおかげで、今まで子どもの立場でしか知らなかった教育現場の現状や、先生方がみんなで協力し運営されていることを知りました。（略）２点目は、児童との関わりという観点より「褒め方、叱り方を学ぶ」ということです。褒め方については、よくできたことはその場ですぐ褒めることがポイントだということを学びました。（略）

教育実習を行うに当たって、ほとんどの学生が目標をもって取り組みました。目標が明確でその方法が具体的だった学生は、視点がはっきりしているため、実習記録の「一日のまとめ」や「反省と課題」も明確になっていました。「子ども一人ひとりを知る」ことを目標にしたある学生は、実習前に名簿と写真で児童の名前を覚えて臨み、毎日児童一人ひとりの良さや特徴を捉える努力をしました。そして、実習最終日には、一人ひとりにその良さを記したメッセージカードを手渡したそうで、担任の指導教員からも感謝と称賛の言葉をもらっていました。

２　苦労したことや困ったこと、失敗したことから学んでいる。

教育実習生とは生徒から人気があり、いろいろな人が話しかけてくれると勝手に理想を描いていました。しかし、現実は高校生にもなると、教育実習生に全く関心がないようで、初めは生徒の冷たい態度に理想と現実のギャップを感じ大変悩んだ。しかし落ち込んでばかりでなく、自ら積極的に生徒に話しかけて心を開くことによって生徒との信頼関係を築いていくことに努めた。（略）

研究授業の日、（略）私自身も緊張してしまい、焦りばかりが前に出て、自分が納得できるような授業ができず、子ども達に申し訳ない気持ちから、一晩中涙が止まりませんでした。いつもは当てても何も答えてくれない子やノートも取らない子が、進んで手を挙げて発表してくれたりして、私のためにしてくれたのに、それに応えられない私に腹が立ちました。（略）

実習中困ったことは、子ども達に「先生」として見てもらえなかったことです。授業中は「先生」でしたが、その他の時間は、友達のような関係でした。これは、私自身が褒める時は褒める、叱る時は叱るといったメリハリをつけられていなかったからだと思います。特に叱るときに遠慮してしまい、あいまいな叱り方しかできませんでした。（略）

教育実習では、授業実習や児童生徒との関わり方などで、どの学生も苦労したことや失敗したことが

たくさんあったようです。授業実習では、教師主導の授業になって児童生徒が退屈したり、児童生徒の頑張りに答えられるような授業ができなかったりと、自らの指導力のなさに悩んだという記述が多くあります。また、発問や声かけでは、「先生の言っている意味が分からん」と言われたり、児童生徒の発言に対する受け答えもうまくできなかったりして、落ち込んだり反省したりもしています。

特別に支援が必要な児童生徒や問題をかかえた児童生徒への対応の仕方が分からなかったり、悩みを抱えて相談してきた生徒に適切な応答ができなかったりしたこと、また、けんかやトラブルの場面に遭遇しながらも、適切な対応ができなかったことを悔やんでいる学生も多くいました。

実習で一番多かった悩みは、児童生徒への叱り方や注意の仕方だったようです。「嫌われたくない」との思いから、注意すべき場面でも適切に指導したり叱ったりできず、先生としてではなく「優しいお姉ちゃん」としてしか見てもらえなかったと反省しています。指導教員の先生の指導をいただきながら、教師としての対応を学び、遠慮せずに叱ったことで「児童との距離が縮まった」と感じた学生もいます。いずれにしても、叱ることはベテラン教師でも難しく、学生にとってもこれから一生の課題となることでしょう。

【実習で困ったこと、苦しかったこと】
・児童生徒の叱り方、けじめのつけ方
・生徒とのコミュニケーションの取り方
・特別支援、問題を抱えた子等への対応
・けんかやトラブルへの対応
・授業中の発問、声かけ、応答等
・授業がうまくできなかった
（H24 事後指導レポートより）

実習では失敗ばかりだった。でも、失敗を経験すればするほど向上心が湧いてきて、「次はこうしよう」「こうやってみよう」と、ひとつ上の自分を目指すようになった。実習では、失敗を経験すればするほど充実した時間を送ることができた。

学生達は、さまざまな失敗を経験し落ち込みながらも、指導教員の助言や児童生徒達からの励ましによって、自分に足りなかったものを知り、教師としての姿勢や対応の仕方などを体験を通して学んでいったようです。

３　自分の未熟さ、勉強不足を改めて知り、今後の学習に意欲を燃やしている

板書は思った以上に難しく、初めはすごく時間がかかって、授業の流れがさえぎられてしまいました。黒板に慣れておくこと、きれいな字を書けるようにしておくことが必要でした。（略）

各学年がどのような力を身に付けることを目標にしているのか、今行っている授業がどのような力をつけることを目指しているのか、そのためにどのような展開が良いのかなど、実習前にもっと学んでおけばよかった。（略）

教材研究をしている時に、その分野のことを詳しくわかっていないことを痛感しました。理解できていな状態で子ども達にわかりやすく教えることはできません。もっと勉強しておけばよかったと後悔することが山ほどありました。

授業実習を行う中で、ほとんどの学生が、自分の勉強不足や実践的な経験不足を認識したようです。一番多かったのは、黒板にチョークで書く文字についてでした。文字が拙くて児童生徒から「先生、下手な字やな」と指摘されたり、漢字や平仮名の筆順を間違って指摘されたりと、教師として恥ずかしい思いをした学生もいます。チョークで書くことの難しさもあり、もっと練習をしておけばよかったと感じています。大学での模擬授業は、学校と同じように黒板や机・椅子などをそろえた教室で行うことが必要かもしれません。

指導案や指導細案の作成についても、大学の講義で学んではいるものの、「授業の課題として提出することが目的で、きちんと書いたことがなかった。」ために、児童観、教材観を踏まえて、指導観を書くことが難しく、授業構想等でも大変苦労したことがうかがえます。実際に自分が責任をもって１時間行う授業を計画するに至って、改めて指導案の重要性が理解できたように思います。さらに、教材研究についても、教科書の内容をどう教えるかに一生懸命になっていたため、児童生徒の思いがけない答えや疑問等に対して、的確な応答ができなかったようで、学習内容に関連して更に深く教材研究する必要があったことを身をもって感じたようです。

【実習前に身に付けておきたかった事】
・板書の書き方、丁寧に文字をかくこと
・学年の学習内容についての深い知識
・広い知識や教養、児童生徒の関心事
・漢字の書き順、学年の配当漢字
・指導案の書き方や授業展開、指導法
・教材研究の仕方、ワークシートの作成
・分かりやすく、要点を押さえて話す力
・模擬授業をもっと多く経験しておく
・スクールサポーター等子どもと触れ合う経験を多く
・自分に対する自信、特技、遊び等
（H24 事後指導レポートより）

指導する授業の教材研究だけでなく、ホームルームや学級指導で児童生徒に教訓等を話せるように、社会人としての一般的な教養、自然や社会に関する知識などを身につけることの必要性も感じています。また、児童生徒の最近の興味や関心事、テレビ番組やゲームなどを知って実習に臨めば、児童生徒とのコミュニケーションを図ることができたり、授業により興味を持たせることができたりしたかもしれないと反省しています。大学での講義などでも、教職を目指す学生が、幅広い知識をもつことができるような機会をできるだけつくる必要があるのかもしれません。

４　指導教員の学級経営や子どもへの関わり方から学んでいる。

（略）そして、何より指導教官になってくださったＫ先生との出会いは、私の小学校教員に必ずなるという思いをより強くしてくださった、かけがえのないものとなりました。（略）「教師はプロであり、人格を育てるためにいる」とＫ先生は教えてくださいました。「その分責任がある、そしてその責任を毎日背負い、教壇に立つことに誇りを持つ」、先生がいつも胸に抱いているものだそうです。

（略）私が一緒に過ごさせていただいた４年１組は、本当に学習規律の行き届いたクラスでした。学習におけるマナーやルールがきちんと守られており、ノートの使い方や挙手、話し合いの決まりがなされていたため、子どもたちが気持ちよく学習できていました。（略）先生のこれまでのきめ細かい指導が目に浮かびました。一つ一つ丁寧に指導し、その積み重ねがすごく大きいと感じました。

（略）放課後の職員暮会で自分達の学級の状況について話し合い、問題解決に向けて意識統一をしておられる先生方の姿を拝見し、教師の職の重さを知ると同時に、「こんな教師になりたい」と憧れも生まれました。（略）

学生達は、実習授業や指導講話での直接的な指導助言は勿論のこと、日常会話の中からも指導教諭の教育にかける思いや考えを聞き、教師としての考え方やあり方を学んできています。自分が悪戦苦闘した授業を毎日こともなげに児童生徒を引き付けて行い、さまざまなトラブルの場面で適切に指導し解決しておられる先生方に、改めて尊敬や憧れを抱いたようです。また、子ども達のために、教職員が一丸となって学校運営に取り組んでおられる様子を目の当たりにしたり、職員集団の中に温かく迎え入れていただいたりして、「こんな先生方と一緒に仕事がしてみたい。」と思ったようです。

指導を担当してくださった先生方は、忙しい毎日の中で、指導授業や指導案についての指導や実習ノートの点検など、本務以外の仕事にもかかわらず、本当に一生懸命ご指導いただきました。実習ノートに細かい文字でびっしりと書かれた先生方のコメントからも、これから教師を目指す学生のために、教師として大切なことを一つでも多く教えてやろう、立派な先生になってほしいという熱い思いが伝わってきました。指導担当の先生だけでなく、多くの先生方に温かくご指導いただき、本当に感謝申しあげる次第です。

5　教育実習を通して、自分の教育観や教師観が変わったりより確かなものになったりしている。

教育実習に行く前は、教師は子どもに教科や社会のことを教えるだけと思っていました。しかし、子どもの中での教師の存在の大きさは、私が思っている以上でした。（略）教師は子どものことを知らなければならない。子どもの生活や人生を良い方向に導いてあげるようにしなければならない。

１時間の授業を受けもつことの責任の重さに怖じ気づき、恐怖につぶされそうにもなりましたし、授業中の子どもたちの「分からない」という顔に焦ったりもしましたが、そのような中で「分かった」という表情を見ることができた時の嬉しさ、あの瞬間は今までの苦労が吹っ飛んでしまいました。また、「分かった」という表情を見たいと言う気持ちが、次のモチベーションを高めました。

教育とは子ども達にこれから生きていく上での生活や勉強を教えていくものだと思っていましたが、実習を終え、教師が子どもを教えていくのではなく、子ども達が集団生活の中で、気づき勉強していくのだと分かりました。それを気付かせる声かけや支援をするのが教師の一番の仕事だ（略）

これまで漠然と思っていた「教師」という仕事を実際の現場で目の当たりにし、また自らも体験することによって、その仕事の責任の重さ、大変さ、難しさを改めて知ったようです。「教師は教えるだけでなく児童生徒から引き出す仕事だ」「教師の役割や影響力の大きさを知った」と、学習指導はもとより、生徒指導や学級経営を通して、児童生徒に人としての生き方やあり方まで教えていく教師の仕事も理解したようです。

授業実習を通して、児童生徒の「分かった」という表情を見た時の達成感、課題を抱えた児童生徒が

変容し成長する姿を見た時の喜び等、教師としての生きがいや醍醐味を、どの学生もが感じています。指導教員の学級経営に触れ、また放課後の担任の仕事ぶりを見て、自分が思い描く学級経営や教師像が明確になってきたようです。

６　絶対教師になるという強い決意ができた。

教育実習最終日、お別れ会で、子どもたちの「先生になって戻ってきてね」という言葉がとても嬉しかったです。この時私は絶対に先生になりたいと思いました。私が先生になってもいいのかなと思う不安は今でもありますが、教育実習を通して、自分なりに良い教師を目指そうと私の中で意欲が湧いてきました。教育実習の前と今で違うのは、この前向きな気持ちと自信です。

教育実習前は、「教師」というものがゴールのようなものに思えていた。しかし、実際はそうではなく、そこから学びの道がずっと続いて行くということを知った。（略）子どもを学ばせる以上、教師も先輩教師、同僚、新任教師、子ども達と、あらゆる人たちから学び続けなければならない。（略）

教育実習が始まる前の学生達には、不安と自信のなさが溢れていましたが、教育実習をやり遂げた今、教師という仕事を理解し、目標とする教師像も具体的になって教職に対する自信を手に入れたようです。教育実習を行った学生のほぼ全員が、教職に就きたいという熱い思いをレポートしています。

12月１日に行った教育実習事後指導で、教育実習生４人が体験発表をしました。教育実習を行った３回生の学生は、自分の教育実習を振り返りながら聞いていましたが、その感想に、「自分として精一杯の取り組みをしていたと思っていたのに、それ以上にさまざまな取り組みがあったことを聞いて、『もっとこうすればよかった！』『そういうやり方もあったんだ！』と思い、自分の小ささ、薄さを感じました。」と書いていました。教師という仕事にこれで良いという「終わり」はないと思います。子ども達のために常に最良の方法を求めて、日々学び続ける姿勢こそが教師に一番大切なものであるということにも気づいてくれたことは、大変うれしいことでもあります。

最後になりましたが、実習校の校長先生を始め指導教員の先生方、多くの先生方には、学校行事も多く大変お忙しい時期に、快く学生の教育実習をお引き受けいただきありがとうございました。学生達は、児童生徒や先生方との触れ合いの中で、一人ひとりが大きな充実感をもち、教職という夢に向かって意欲を高めることができました。皆様方の温かいご指導に心より感謝申しあげます。今後、学生達は、教員採用試験合格を目指して頑張り、一人前の教師になることこそ皆様方のご恩に報いるものと存じます。どうか、今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

教育実習を終えられた皆さんは、夢の実現に向けて最後の関門である教員採用試験に向かいます。「先生になって帰ってきてね」という児童生徒の励ましの言葉を胸に、知識と教養を高める勉強はもちろんのこと、自分自身の人間性を磨き教師としての資質を高めていってほしいと願っています。

また、これから教育実習を行う皆さんは、先輩のメッセージを参考に、実り多い教育実習になるようにしっかり準備をしてください。

信頼される教師とは

文学部　教育学科
講師　谷　山　優　子

１．子どもの成長を願い成長を見通した指導ができるか

『生徒指導提要』（文部科学省平成22年３月）では、子どもたちが成長できる集団とは、以下のことを基盤とした集団であるとしている。

１安心して生活できる
２個性を発揮できる
３自己決定の機会を持てる
４集団に貢献できる役割を持てる
５達成感、成就感を持つことができる
６集団での存在感を実感できる
７他の児童生徒と好ましい人間関係を築ける
８自己肯定感、自己有用感を培うことができる
９自己実現の喜びを味わうことができる

これらを見ると、集団の中で人間は成長するのだと改めて実感する。

しかし、今日、集団指導には大きな課題がある。社会の価値観が多様化し、学校が身に付けさせたい規範意識と家庭や地域のそれとに距離ができているのである。たとえば、「服装の乱れは心の乱れ」として指導してきた学校に対して、もはや家庭も社会も「先生のおっしゃるとおりです」とはいかないことが多い。集団全体の指導に対して、個々の利益を優先させたいという申し出も多々ある。茶髪の児童生徒に「染めないように」と指導すると、すぐに「髪を染めてはなぜいけないのか」という保護者の問い合わせが来ることがある。そのときに、納得してもらえる回答がなかなかできないのである。「みんなと同じようにしましょう」とお願いしても通じない。「外見で人を判断するのか。茶髪は子どもの個性だ。」とさらに詰め寄られる。子どものどのような成長を願っているのか、学校と保護者で一緒に取り組んでいきましょうという答えを用意し、教職員間でそのことを共通理解をしておかねばならない。教員がばらばらな指導観を持っていると、学校としての回答がぶれ、そのことは保護者のあいだにメールなどを通じてあっという間に広がり、学校不信につながる。

ほかにも、気になることがある。失敗を恐れる子どもが多くなったことである。失敗をしてはいけないものだと思い込んでおり、どうやったらうまくいくのか、やる前から聞きに来る。保護者も子どもに失敗をさせたくないという思いが強い。子どもの失敗は自分の子育ての失敗のように考えるのだろう。集団の中で生きていくうえで、対人関係の失敗はつきものである。それをどう回避するべきか、どう解決するべきかは、失敗から学べる。担任が、「けんかをしたのですが」と電話で切り出すと身構える保護者が多い。保護者に伝える際には、「このけんかで相手へのどういう配慮が足りなかったか、しっかり学ぶことができました。これからは手を出さずに、言葉で伝える練習をしていこうと話をしました。」

などと、子どもの今後の成長するという見通しがもてる話をする。できれば顔を合わせて話をして、保護者の理解と協力を得るようにしたい。

２．心に入るほめ方叱り方ができるか

我々は「指導が入る」という言い方をするが、どんなに子どものことを思い、熱く語っても信頼関係がなければ、子どもの心に入らない。大声で怒鳴ったり、威嚇したり脅したりという力の指導では、いったんその場で収まったかのように見える問題行動もまた繰り返される。子どもの問題行動の原因が取り除かれていないからである。逆に、子どもに好かれようと、宿題を出さない、不必要なものを持ってきても注意しない、好きなようにさせるといったことははじめは子どもは喜ぶが、すぐになめられて、学級の秩序が崩壊し、こんなクラスにはいたくないと子どもが訴えるようになる。指導をしたことで子どもが変容し、問題行動や不適応が減り、学校生活を有意義に送り、目指す進路に向けて進んでいくという姿を目指したいが、どうしたらよいのだろうか。

子どもが信頼する先生は「ほめ方が上手」「叱り方が上手」「公平である」という先生である。

①ほめ方

・やって当たり前のことをほめる。（忘れ物をしなくてえらかったね）

・言葉だけでなく、非言語（目を合わせる、ゼスチャー、合図）でほめる。

・具体的にほめる。（この「の」の字がとてもバランスがいいね）

・みんなが見ていないところでほめる。（みんなの前でほめられるのは照れる）

・やってくれて嬉しいわ、助かるわ、ありがとう、と私メッセージでほめる。

②叱り方

・人格を否定せず、やった行為を叱る。

・あなたが危なかった、健康を害するので心配だった、と私メッセージで叱る。

・メンツを潰さない。（みんなの前で叱らない）

・逃げ道を作ってやる。（叱ったあと、信じてるよと笑って解放してやる）

・毅然とあっさり叱る。（感情的にしつこく叱らない）

③公平な対応

・「またお前か」といったことを絶対に言わない。

３．子どもを信じ続けることができるか

子どもたちからの信頼はこのような対応の積み重ねで築いていくものである。問題行動を指導し、「もうしない」と約束してすぐに同じ過ちを繰り返しても、「先生は信じてるよ」というメッセージを発し続ける。何度裏切られても信じ続ける。こうして築いた信頼関係もたった一言の皮肉で子どもがそっぽを向いてしまい、指導困難に陥ってしまうことを肝に銘じたい。

子どもが将来に夢を持ち、自己実現をしていく姿を思い描きながら、すぐに結果の出ない生徒指導を粘り強く繰り返していくのであるが、10年後20年後に「先生がいつも言ってたことが今になってわかる」と思ってくれたら苦労も吹き飛ぶ。それが教師の仕事の醍醐味なのだ。

授業をするための専門性

家政学部　家政学科
教授　田　中　陽　子

本学家政学科で教員免許状の取得をめざす学生は、「教養科目」「教職科目」「学科専門科目」でいろいろなことを広く学んだあと、「卒業研究」で一つのことを深く研究します。これらの学びの全体が家庭科教員の専門性となって長い教員生活を支える基盤となります。もちろん、実際の教育現場で教員が対応している教育内容や仕事は大学の教職課程の内容をはるかに超えて高度で奥深いものです。そこは、教職に就いて以後の学習によって自覚的に補充していきながら教師としてのキャリアを積み上げていくことになります。さらに言えば、自身の生涯をかけて堅実に勉強を重ね、学力と人間的器量を磨いていくことが求められます。加えて家庭科教員の場合は、生活課題を教材とする教科の性格から教員自身の生活認識や問題意識が問われるため、常に「生活者」としての知性と感性を磨いていく必要があります。とはいえ、現実には長時間労働や多忙化のなかで、多くの教員にとって学び続けるための時間や仲間をつくることは困難になっていると言われており、ワーク･ライフ･バランスの問題とともに、キャリア発達は切実な課題になっていると思われます。

中・高等学校の家庭科教員にとって専門性は重要です。共通教科のほかに専門教科を含む高等学校では、キャリア教育を担う位置づけから、教員にはより深い専門性が求められます。ここでいう専門性とは、家庭科の授業を豊かにするための学力のことで、教育内容を理解した上で、授業をするために必要な知識や技能を保持していることを意味します。言うまでもなく、授業をするためにはこの専門性に加え、目標に向かって生徒を導いていくための指導法も必要です。指導法は、計画・実施・評価という授業設計の全体にかかわるものなので、実際の授業場面で必要となる発問や板書の仕方などの他に、学習指導計画の作成や評価法などを含みます。指導法は児童生徒の反応や他の教員との交流を通して鍛錬できるのに対し、専門性は教員自身の自立的な学習によって蓄積されていくものです。つまり、指導法はその基本が各教科に共通するため、他教科の教員からも助言を得ることができるとともに、生徒の反応で未熟さや問題点を痛感することができます。それによって、自分の課題や改善方法を探究することができます。しかし、専門性については、よほど自覚していないと、ひとりよがりな満足に堕してしまう危険性をもっています。そうなっていたとしても指摘してもらう機会が少ない点で、専門性の鍛錬は孤独な営みでもあります。ですから、同じ家庭科の教員同士で専門性の研究をすることはとても大事なことだと考えます。

授業を行うための学力はおもに教材研究によって蓄積されます。教材研究は50分という授業時間の何倍もの時間をかけて、教材に反映される教育内容を理解し、生徒に教える内容をまとまりのある体系的な知識として自分のなかに定着させたり、技能を向上させる作業です。また、教師の専門性は、たとえどんなに時間をかけても、授業という実践の場をくぐらせなければ授業を豊かにするほんものの学力にはなりません。加えて、家庭科教員の専門性は知識や技能を自分自身の生活に結びつけ、生活をくぐらせなければほんものの専門性にはならないと言えます。生活者の資質が授業を支える力となるのです。